活を維持してゆける。これらの事情から永い経過のあいだにおのずから利己的な人が生存上かえって重要な社会的価値をもつことになり、今日にいたって利己心は深く民間にはいり自然の風俗となってしまった。歴史について真剣に考えねばならぬゆえんである。この心理の発するところを究めるに実に毎年連続的な凶災と加うるに貧窮の結果によっており、そしてもっとも貧窮なるときはさらに尖鋭となってあらわれてくるのである。

(5)

文盲、保守、迷信等にいたっては中国人に特有な一種の「愚」的表現とされている。一般の中国人は一般の西欧人に比較するに常識、智力の各方面にすべて劣っている。これは中国は農業国であり、かつ貧窮社会であるからにすぎないことで、農業および貧窮の国家社会内にあって、一般人はすでに最低生活を維持するに困難な歴史を経てきたのに、なんで有閑的教育をもとめる余力があろう。教育は普及せず文盲、迷信、保守となるのは実に必然のことであり、中国人の「愚」もまた貧窮の結晶であって、けっして遺伝性の民族性ではないというゆえんである。

貧窮が中国人の精神生活を剝奪し、中国人を文明的施設にしたがわしめず、病、弱、私、愚を社会的病態としてしまったのである。これすべて貧窮の影響を受けるからである。今日新中国民族を建設するにあたり、復興の声は高き叫びとなっているとき、中国貧窮問題の解決は実に最緊要のことであり、まさに必須の政策であらねばならぬ。

附記　本稿は上海特別市社会局刊「社会月刊」第二巻第六号（中華民国二十八年十二月十五日発行）所載、聞韶氏の「中国貧窮問題」より要約したものである。

本稿　社会事業論叢　第一巻第三号（昭和十五年六月二十日発行）掲載。
筆名　弘済会調査係

十一　附　録

(一)　社会事業理論への示唆

——日傭労働者の生活気分について——

(一)　いわゆる被救恤者的性格の実験

協調会労働年鑑（昭和十四年版）は被救恤的飢餓線上をさまよう危険な綱わたりの家計実例をかかげている。この例示の主人公は日傭労働者であって、達者なときはいわゆる食ってチョンの生活をつづけ、病気になると市の救護を受けると、みずから語っているのである。社会事業の門を一番多くくぐる者の前職は、こうした日傭労働者であった。そして彼等をいわゆる被救恤的窮乏層に沈澱させるのは、仕事のあぶれと病気とが数えられていた。

世帯をもった日傭労働者はまだよかったのである。実は世帯をもつこともならず、伊那のオヂ坊主をもっと悪くしたような人たちが、そのいく倍か生きているわけである。

達者でありかつ仕事にあぶれぬかぎりは、どうにかやってゆけるわけではあろうが、大正十三年に出版した大阪市社会部の「日傭労働者問題」は、悲惨な就業争奪戦の場面を描写している。

一段小高く設けられたプラットホームに立ちあがった呼出係（これを手合衆という―小島）は身近くにつめ寄せた彼等の手を払いのけるようにして、まるで羅売りそのままの大声と調子で「鉄砲五人ん、一円八十銭、誰か行かんかっ」という風に仕事の種別や人数や賃銀やをどなり立てると、その声に応じて彼方からも此方からも「おやっさん、やってんかっ」「親方！行こうか」の声と共に忽ち四、五〇の手が出る（同書　七四頁）。世のなかの景気がよいと鮟鱇の失業もいたってすくないが不景気になるとその日の仕事を見つけるのは彼等にとってはなかなか大役である、したがって彼等のなかには早朝より寄場に詰め掛けてかなり呼出係に近い場所を占めることによって、誰よりもその日の仕事に優先することに努めるというような惨めな奮闘をやっているものもすくなくない（同書　七五頁）。

この描写をよんだ人のなかで、不熟練労働者の最下層に沈澱した者の顔と心とを、はたして何人が理解できたであろうか。ただ不景気だからあぶれるものはあろう、だから失業救済事業はおこさねばならないという結果、この事業の実体はとわないとして、大阪でもいくつかの美しい産業道路が建設され、延にして莫大な量の労働力がここに動員される。

大阪市がこの調査をやって二十年に近くなったいま、国をあげておびただしい人的資源の不足になやんでいる。いままで夢想だもしなかった現象がつい眼のまえにきてみれば、あっけにとられたようなかたちで、社会のすべての問題は人的資源論から割りだした理論のもとに総合され再編成されようとしているのである。さしあたり不熟練は最下層の労働者をも、国の旗幟のもとに動員できればやろうと、だれしも考えたであろうがはたしてその

結果はどうであったか。もう一つはかばかしくゆかないのである。

日傭労働者にたいする安あがりな理解が、理論をたて政策をすすめる人たちの頭脳に支配的であったために、ついぞ親身になって彼等のゆく末を正視しうる人が何人もいなかったことが、多くて複雑な諸原因のなかで中心の禍根をなしている。しかしこれも無理ないことであるというのは、日傭労働者の生活気分、生活態度を親身になって観察しうる、いわば実験の機会というものがいままでになかったからである。社会の一人たりとも社会共同の幸福のために生きねばならぬという不文律が、国の政治家にも真に理解された大正七、八年から以後、社会事業も社会政策もともに本格の軌上にはのったが、実験の舞台は歪曲された姿をみせていた。大戦終了後いくばくもなくして日本は不景気が慢性化し、世界の国々とおなじく恐慌のあいだをよろめきつづけたわけである。この社会の環境にたいしてもっとも抵抗力のよわい日傭労働者には、みずからの意思のままに生活をつづける余力のあろうはずはない。環境の重圧は生活の歪曲をきたし、歪められたみずからの意思は外部にとうていあらわされず、寄場における就業争奪戦となって、われとわが身の賃銀を低落させ、残余のより大なる群ははかないルンペンの生活に甘んじたわけである。

いまは事情が一変している。はたらこうとおもえば職はいくらもある。このなかに彼等はどんな態度にいで、またどんな生活気分をもってどんなにはたらいたか、この実験の機会を日本の労働政策が出発して以後、はじめてあたえられたわけである。社会の環境がいままでの歪曲から正常へと向きなおったというのではないが、とにかく、はたらこうという意思があれば実現と行動化に困難な障害は一応とりのけられたわけである。

わたくしははじめ民俗資料をうるために沖仲仕と仲間の親分子分の制度を調査にかかったのであるが、そのころ朝鮮よりの出稼労働者の問題を提げて沖仲仕の調査にでていられた協調会の井上正雄兄のあとを引きついだよ

うなかっこうになって、みずからの研究の埒外の労働事情の調査にまでいつしかのびていた。ここに彼等の生活気分に関連した点をノートから摘記して朝鮮社会事業のために参考にしようと思うのである。

わたくしの思考の基底としては、社会事業の対象たる要救護性（貧窮現象）を、その担当者たる個人または集団の素質と、彼が生活している環境と、これにたいする外部からの行動とによって関数的に決定されると理解する。本来白紙であるとみなしてもよい貧窮民の素質（必然に彼は労働力をもっている）が、環境のある方向へのすすみと、行動としての社会政策の欠如によって、彼のもつ労働力が商品化しえない状態に転化するとき、彼は要救護性を担当するのである。これをさらに分析すると、みずからの労働エネルギーを組織的に放出せしめるべき彼の精神状態と肉体状態との統一を意味するので、肉体の破壊もしくは精神の破壊が彼を社会事業の対象におくわけである。肉体の破壊については理解せられやすいが精神の破壊は極度の性格破産者のほかは発見も研究もきわめて困難である。その一つの実験のみちとして、性格破壊がいま進行しつつある状態をとらえ、彼を熟視することによって彼の環境との関連から総合的に理解しようというもくろみをわたくしはもっていた。日々就業のおちつかない日傭労働者の生活気分が、このよい実験台だったのである。

肉体上の被救恤者的性格については、救療が社会事業の重要な一部門であったために、これまで多くの人が注意し、またその限界線上をさまよう危ない生活は、たとえば工場労働者の疾病災害の実情などとして詳しく調査はせられてきた。その一方の精神上の問題も、おなじく社会事業の支幹であり、そして大事さはちっとも劣りはしないのだが、たんに研究方法がむつかしいというだけで等閑に附され、したがって社会事業の門もこれがために備えて開かれたという例もすくなかった。被救恤者の精神の状態がどうであるかを、さていま調べてみようとしても方法はどうか。ここにカードに登録された二、三の実例をとりあげたとき、実験者は彼等の生活に倦怠を

感じているという。だから彼等に生活のうれしさをとりもどしてやろうという。それが社会事業のもっとも重要な意味であるととなえる人さえ最近になってでてきた。実験もせずに蒸気機関車をはしらせたような危険がなかっただろうか。

問題はそんなに生まやさしくはなかった。社会の敗残者の精神的性格が、研究者の頭にすぐピンとくるような、世をそむいたすね者の心と、警察と精神病院の厄介になるこそ泥と気狂いの、それら表面にあらわれた極端な性格だけではない。またそうだとしても、彼等の素質がこの性格をみちびいたのだという中世紀の偽善道学者のようなことを信じたくはない。もっと多岐な、もっと真実の現象と本質とを、われわれはつねに追わねばならない。そうでないかぎり社会事業はいつまでも、なにか不安心なものたりなさにつきまとわれ、そしてこれをみきわめたうえでないと、社会事業の一分野で候と、だれが大きな顔ができようか。理論はどうにでもつくが、社会事業はつねに技術であり実践であった。理論の正当さのためには、かりに世間が迷惑してもよいという根拠がそのどこにもひそんではいなかった。

環境が人間の順当な労働力の再生産をなしえない状態にあると、その体を心をたえず蝕んでゆく。肉体的には社会的労働にたええない健康の状態への移行、精神的にもいっさいの希望と光明とを失ってしまう状態への移行、この徐々なる連続の過程に一線を画して、貧窮の担当者とそうでない者とに区分する。貧窮民にもっとも近しい関係にある日傭労働者のうちでは下級は「あんこう」とよばれる人たちの生活気分は、いま移りゆきつつある動的現象であるとみてもいい。だが観察の方法はしかし単直ではない。えて調査といえば統計的方法を連想するのは、社会実験者の無意味な固執であった。この方法の最大の欠陥は現象の躍動的実体を把握しえなかったことにある。いわば活動写真でなくて幻燈である。相関的依存関係の闡明も、さきにうつされた一枚のフィルムと、あ

との一枚の映像との関係の不鮮明な推察にすぎなかった。連続の発展のなかに類似の現象を数多くえらびだす、統計的方法では費用と労力にはばまれてとうていできないことだが、量の強度よりも質の動態を熟視したいわたくしには、このいくたの現象をつなぎ合せ重ね合わせたときに、すこしずつの発展はおのずからあらわれようという、いわゆる重出立証法を統計的方法と相互補完的に採用してもいいと思う。そしてわたくしは連日ノートをもって、あんこうの心をよみとろうと、身のうえ話をきき、また炎天のもとたずねまわったのである。これも実感のともなわないことは一句だって書く気になれないという、わたくしのいらぬ気苦労によっていた。

(二)　あんこうの名義

大阪市で日傭労働のことをあんこうという。種類は沖仲仕も倉庫仲仕も、その他の手伝いも土工もあるわけだが、定まりの縄張りといった職場をもつ「なかま」にたいして、その職場へのワリコミとして毎日顔をかえたセシュ（雇傭主）のところへゆくのをあんこうとよんでいる。あんこうという名前が大阪だけのことか、それとも他の地方にもそうよぶところがあるのか、現在のわたくしの知識ではわからないが、東京では立ちん坊といい全国一致した呼称ではないらしい。

あんこうの語源については、通例魚の鮟鱇にもとづくといわれ、その魚が餌の流れくるをじっと待っているように、仕事のあるのを宿場でじっと待っているから名づけたのだともいう。また安く雇われるから安雇だという説もあるそうだ（日傭労働者問題　二九頁）。しかしこの両説とも民衆語源説の域をいでないものと思われ、前説が後説にたいしてわずかにうがっているのみで、いまだ信用はできないようである。名前が別々にあって、いわゆるもの知り連の捜さくがついにこのような民衆語源を信ぜさせるにいたるわけである。わたくしは大阪市のあ

んこうのほとんど全部を支配下におさめている代々の築港の大親分Aさんに念のためうかがってみたが、彼は御存知なかった。あんこう語源がいわゆるもの知り連の机上の遊戯的捜さくでないならば、この人がしらないはずはない。実に大阪市にあんこうが発生したのは、六十の坂をこしている大親分の記憶にうすれるほど遠い話ではなかったからである。語源の捜さくなどはどうでもいいようだが、実はこのことばをあきらかにすることによって、あんこうの発生に大きな研究上の光明が与えられる予想がわたくしにはついているのである。

第一語源説に似たものに、江戸末期における売笑婦の称呼をアンコーという、鮟鱇は魚屋の店頭につるしてその肉を切りうりするもの、これより売色への連想によると大百科辞典に藤沢衛彦氏はかいている。これも好事家の民衆語源説かと思う。

一体あんこうという魚はどんなものであるか。この大阪市ではあまり親しまれなかった魚で、その棲息のさまがただちに庶民の脳裡におもい浮んだかどうかは疑問である。無識な日傭労働者の称呼は彼等自身のあいだからまず発生したことをわたくしは信じたい。そしてあんこうという魚が動物図彙にもでている鮟鱇とするのも、実は心細い推理であった。九州の一円から日本海岸では若狭、越前で飛魚のことをアゴという（漁村語彙）、筑前志賀ノ島ではこの尾鰭を干してのしに使っている（ドルメン　第三巻第二号）。渓流に住んでいる大山椒魚をアンコーという地方はこの動物の分布区域の東半分、すなわち信州の南部から兵庫県の西境までで、それから西はハンザキ・ハンザケという。播磨では以前アンコーを食っており、海魚の鮟鱇はかえってしらなかったという（山村語彙）。してみれば海魚の鮟鱇とむすびつけるのが、そもそも疑問であって、まず魚名の捜さくがすんでからでなければならぬことになる。

わたくしはそのほかにアンコーに関係ある語彙を二、三あつめてみた。

アゴ、オゴ、アンゴ〔伊豆〕
ソヘアンゴ〔出雲〕
アミコ〔伊豆内浦〕
以上はすべて漁業の網子よりでたことば、漁業労働者のことである（漁村語彙）。
アンコウ　長州蓋井島では塩田のなかに設けた櫓。
アンコ　河内国にて魚をとる道具という（漁村語彙）。硝子でつくったものもあり江戸時代からあった、モンドリのことである（大阪民俗談話会記録第九図）。

してみればふしぎに漁撈に関係あることばであって、陸中紫波郡飯岡村で女子のみつづいて生れるとアンコという名をつけるというものとは、まさか関係はないであろう。

これだけの知識でもって、あんこう語義の考察はちと勇敢すぎるが、あんこうの語音が魚の鮟鱇と附会されてそうなったので、いまも彼等社会の発音はあんこである。あんこのこが労働単位の意味であることは、おそらく誤りはなかろう。

「イヘノコ（家の子）、ヤツコ（家ツ子）、ミャツコ（造）等のコはみんなこの労働単位としてのコであつた。これにたいして血を別けた親子の方は却つて、その頭にわざ〳〵「生みの」といふ言葉を冠して、「生みの子」、「生みの親」といつて特に区別したのであつた。なほその他にも労働単位を示す言葉としては、狩に於けるセコ（勢子）、山仕事の場合のヤマコ（山子）、東北ではこれを動詞に使つて「ヤマコしにゆく」などゝいつてゐる。それから海上労働の方ではカコ（水夫）、フナコ（舟子）、網引に働くアゴ（網子）などがある」（柳田国男　郷土生活の研究法　一九七頁）。

「これらのコは言葉をかへていへば即ち奉公人であつた。建築技術の進まない時代にあつては、大勢の家族の皆んなが一つの屋根の下に住むことが出来なかつたのでこれらのコは一つ屋敷の中に別に棟を分けて住み、親分を中心に一かたまりの作業団をなしてゐた。これで寄子であつた」（同書、一九八頁）。

アンコのコが労働単位をさし、いまも彼等の社会に生きているクという労働単位を意味することばと同じであろう。それで漁業労働者の網子について資料を列記しておこう。

アゴ　網子即ち網曳共同作業に働く者をアゴと謂つたのは古語であるが、九州では今もこの語の行はれる所がある。たとへば肥前小浜あたりでは之をアゴといふ外、アミコ・アムコ・アムコドムなどゝも謂ひ、千々岩ではナゴと称してゐる。近い頃まではまだ弘く行はれてゐたことは、真澄翁の紀行にもみえ、秋田八郎潟の浜に於て冬魚の網を曳く者は七人一組が通例で、其内の六人をアゴと謂つた。

オゴ　九州の諸島で、漁船の水子をオゴといふはこれも亦網子である。肥前江ノ島など、船方ともいふがオゴの方が通りがよい。薩摩甑島の瀬々ノ浦でもオーゴ、但しシビ網の水手に限つて居る（下略）。

ヒオコ　肥前下五島の島蔭でも富江あたりでは漁船の働き手をヒオコとも船方ともいふ。日網子すなはち傭人の意かと思はれる。

アンゴ　伊豆では網子をアンゴといふ。此はアミコなどよりも古い語のやうである。豊後南海部などでいふヒキコもこれである。

アミコ　伊豆の内海の漁業組織に於ては、網子をアゴと謂はずにアミコ又はアンゴと謂つて居る。こゝでは親方・村君・網子の三階級があつたといふ（分類漁村語彙）。

この国では山村の出稼人よりも漁村の出稼人のほうが、より早くから、より量的に大きい社会への意味をもっ

ていた。そしてわが国の西半分のこうした出稼人は大阪を中心とする地域にあつまった。瀬戸内海の海辺から九州へかけての漁村の下級な労働者がちょうど瀬戸内の奥つきのような大阪にたまったということは考えられるし、調査のすべもいまならばある。そして不熟練な日傭労働者の仕事は、陸上作業のオカ仲仕よりも海上のオキ仲仕のほうがさきであり、また臨時の労務者を工場工業が必要としなかった明治中期に、すでに荷役運搬の交通労務は十分近代化していたのである。そして従来大阪の各川筋の船仲間から発展した沖仲仕や倉庫仲仕の「ナカマ」の制度について、地方の出稼人のたむろした港口に、臨時の労力需要をまつ多くのアンコが一つの組織にまで発展していったことを推察するのにむつかしくもない。実はその発生のいきさつを語源を中心としてながめてみたかったのであるが結論をつけるには時期尚早である。もっと多くの地方の知識を総合してからでないとなんともいえない。

(三)　あんこうの生活形態

いまさらあんこうの生活形態の話も、別段めずらしくもあるまいが、順序として二、三の輪郭をのべておく。

あんこうは生活形態からわけると部屋ものと浮浪ものとがある。仕事のうえではまことに雑多であるが、この生活形態の区分によって、彼等の生活気分をも律する同類型の集団に分割できると思う。前者は部屋あんこう、後者は立ちあんこうとよばれ、参考までに附記すれば朝鮮の労働者はそのいずれにも若干ずついるわけである。

部屋あんこうは部屋といわれる合宿所に起臥し、部屋はこの界隈にいくつかあるが、一部屋には大体十五人から二十人位ずつのあんこうが起臥し、これを若い衆という。つくりは普通の民家であって、下は事務所と主人部屋と小頭の部屋とにとり、二階は六畳と八畳位で二十人も寝るとすれば、一人一畳に不足する。

部屋の主人をオヤヂといい、セシュ（雇い主）からオヤヂに明日は何々のしごとに何人よこしてくれ、タンカ（一日の賃金）はいくらと、前夜に申し込んでくると、番頭が若い衆を各しごとにまくばり黒板に掲示する。部屋ものは前夜からゆきさきも賃金もわかっているわけである。番頭は忠実に五年もつとめあげたあんこうからえらびだし、会計上のいっさいのことを担当する。また部屋には十人に一人位の割合で小頭がいて、これは三年もつとめて忠実な古参よりえらぶ。普通に「小頭ボーシかぶるのに三年」という。七、八人もまとまってゆく仕事には、小頭が差配についてゆく。つまり施主ではあんこうの技能や体質がわからぬから、それを熟知した小頭が、これにかわって差配するのである。

賃金は月末に施主からオヤヂにわたされる、オヤヂはそのなかから前貸しと食費とアタマを引きさり、本人にのこりをわたす。仕事によって単価はちがうが大体通常の仕事で一人一日分三円とすれば、アタマ（頭刎ね）が一割の三十銭、食費八十五銭（これは公定である、食費の実費は昼弁当をふくめて六十五銭で二十銭はいわば宿代である）、前貸しは給金前毎夜の小遣と散髪と風呂銭とを貸すもので、これらを引きさると月勘定に二十五円から四十円位になる。いくらもらっても勘定の翌日できれいにつかってしまうのが普通であるから、三日目からはまた前貸しをうけるのである。

ところが立ちあんこうにはいっさいこの保障がない。彼等は二十銭ヤド、三十銭ヤドにとまり、一ぜんめしで飯を食う。ヤド代（宿泊料）がなければ露天で眠り、飯代がなければ水をのむ（これを金チャブという）。ヤドは昼もいるともう十銭をとられる。朝は六時ころ、寄場にでてゆき、ここで工場や倉庫からの請負人が申し込みにきて、手合衆がせり市のように紹介し、請負人が申し込みの希望をつれてゆく。単価はしたがって当日の需給の調子で部屋あんこうよりも高くもあり安くもあり、その日の給金はその日に支払われる（本年六月末の統制により

それがなくなったが)。しごとも施主の顔もわからないから、あんこうは油を売るに腐心し、施主もこきつかうことをのみつとめるのは当然のことである。

ここではあんこうの福利施設についてのべておく。医療のためには何とか病院があるそうだが、みればかならず失望し、わたくしのことだから憤慨するだろうと思って、いまだにみていない。そんな施設よりも、ほんとうにあんこうを働きやすくするのは手軽で積極的で、よろこんで利用できるものでなくてはならぬ。さびしいことだがそれがいまはないのである。ひところ、労力の過剰になやんだときにはつかいかたもいたってあらかった。施主にとっては人間よりも荷物が大事であることを、露骨に表現した。草履をはいていったときの作業上の負傷はみとめなかった、勘定をオヤヂがくすねることは常にあった。病気をすればどうにもならなかった。

この弊害をさとった部屋のオヤヂから、だんだんとゆくさきのともどもの利益を考えるようになっていった。いまではもっとも真剣に考えているMさんの部屋では、六十人に余るあんこうが楽しくたちはたらいている。Mさんが部屋をひらいて以後の満四ヵ年、まずあんこうが何に感銘し何をよろこぶかについて、しずかに黙考せられ、彼のよろこびをわがよろこびとするみちに、部屋の福利を開拓せんとつとめられたのである。その結果、一つの部屋のオヤヂとしてはいまだ十分のものができえようもないが、茶話会と親睦会というようなものをつくっている。病気になれば安心してオヤヂの世話になれる部屋はそう沢山はないのである。Mさんの心は、いままで永く鬼のオヤヂを想像させたこの社会に、かぎりなく尊い。

これらは集団的に存在する築港、市岡などの工場、倉庫街のもので、大阪全市はもちろん布施市、堺市などの接続工場街にもはたらきにゆく。このほかに日傭労働者に関した労務需給の機関には、住宅街に手伝入方を専門にするちいさな寄場、葬儀や社寺の行事にでる人足の入方を専門にするミセなどが沢山ある。これらの手伝いや

人足は近くの裏長屋や二階をかりて住まい世帯もちであって、親方の家を寄場またはミセというもの、寄場では毎朝手伝人夫があつまり、やはりあぶれる者もいく人かはあるわけである。官営の労働紹介はこれに比してきわめて微弱な機能をしか、いまははたしていない。

(四)　部屋あんこうの生活気分

どういう者が部屋にくるか。地方は四国と九州の海辺、ときに大和、紀伊の山村から。一度は志をたてた出稼人であったろう。六十人の部屋者をもつMさんの部屋に、中等学校卒業者がいま八人もいる。年のころは二十代がもっとも多い。彼等にはふた親そろったものはほとんどいない。愛にうえた者、継親にいじめられた者、小僧奉公で酷使された者、両親があればよほど悪化した者で、結局この仕事が気楽だと住みついたのである。

もちろんオヤヂの性格によって若い衆の生活気分はちがっているが、この過去の育ちといまの生活形態のうえに、彼等の生活にたいする態度はどうであるかの、二、三のいちじるしい点を摘記してみる。

性　質　いたってすなおであり、一時の憤おりも一夜ねむれば忘れてしまうといったところ、漱石の坊ちゃんを思いおこしてもらえばよい。それだけに何でもない突差の感情による喧嘩はたえまがなく、宵の口から市岡の大通りを散歩すれば、たいていいくつかの喧嘩をみた。いまは酒がなくなったのでよほどよくなった。

行　儀　部屋あんこうの行儀はいたってよい。常なら事務所のあたりに群がっているものが、客人があれば近くへもよらないし、便所が上と下と二つあり、混雑するから上へはいってもよいといってもけっしてはいらないし、また新米のトビコミにたいする些細な世話、小人数で仕事にゆくときの差配が、古参か年かさによるという順序、これらは一糸もみだれない。

労　働　大体まじめにはたらく。彼等が仕事を休むのは労働への嫌忌ではなく、他の傍観者には諒解のできない感情的な慣おりである。だからケツをわるというのも、仕事のえらさによることは非常にすくない。施主の労働強化はいろんな形で強制されている。たとえば新米のよくはたらくあんこうがたまたまくれば、ことわれないようにしむけてトオシ、オヒトオシで二日、三日と部屋へかえさないことがある。あの男はそう丈夫でなし、気が弱いのでようことわらないので今日で三日です、体を悪くしなければよいがと、実直なオヤヂならいつも心配している。またデッチというデッチ車を引く仕事でも無理をすれば倍の重量はつめるし、十人のなかに十五の車をあてがえば積み込みをまつ休憩の余裕をなくしうるわけである。こうした無理なつかい方にも、たいていは終日労働するのが部屋あんこうである。しかし一番困るのはセメント、石炭、黒鉛、燐礦石の荷役であり、真白に、真黒になり目もみえぬようになるので、この仕事にケツをわるのが多いという。

これが立ちあんこうではまったく別である。部屋という一小社会への責任のない心理は、一つの工場内作業の動作のうえにさえはっきり一目でよみとれる。案内しましょうとMさんはいってくださった。まったくそのとおりである。施主のつかい方もわるいし立ちあんこうの働き方もわるい。現象をみているのでは本末が循環して帰着しないが、労働強化の弊害だけは断言してもよい。立ちあんこうはいわばどこの馬の骨ともしれぬのである。酷使した翌日の肉体は、今日の施主とは無関係である。船荷積込作業では人間よりも荷物が大事だという考えがある。ヤリジマイという定量の仕事に早くしまえば単価をねぎるというて、その結果が一日ずつを暮らせれば最小限度の労働日をもとうとする。多くて月に二十日、大半は半月の労働をしている。それより以上はできないのではないか。そして病的な労働嫌忌者が一人ずつふえてゆくのである。

わたくしは年のころ三十五、六という、みるからに堂々たる体軀の丈夫男にあった。いまは某組の小頭をしているFさんであるが、二十歳をすぎたころからはたらくことがどうしてもいやであった。駅で一銭マッチをうり、遊び人の部屋でジンギをきってその日の食にありつき、それでもはたらくことをしなかったという。どうした奇縁かいまの部屋のオヤヂに心服し、小頭にまでなったのである。大きな教訓ではないか。

世　間　世間にたいする態度は結局すね者だといわねばならない。なぜ不安定な日傭労働に甘んじているのか。またなぜ工場の定傭になるような努力をしないのかという疑問へのこたえは、結局はっきりとえられなかった。立ちあんこうは窮屈だから部屋あんこうにならない。部屋あんこうもまた窮屈だから定傭にならないというのみでは、これが回答にならぬかもしれないが、部屋ものでも一日はたらいて夕の六時に部屋にかえれば、あとは純粋のわが時間である。いやであればいつでも仕事を休めばよく、さまたげる何ものもないわけである。いっさいの人間社会の労苦、家庭の気苦労はこの社会にはなかった。過去において、家庭生活のたのしさをもたなかった彼等が、社会人としてのわが身の建設を、明日の希望としてもたせようとするほうが無理である。万事に消極的な性格が、いわゆるすね者、変り者として他人の眼にもきわだつほどでなくとも、大なり小なりこうした気風は、皆のあんこうにゆきわたっているのである。

変り者、変り者と名ざしされる者はいくらもある。とくにいちじるしいと思う一例をここにあげると、Kという十九歳の男、昨年の三月に映画館でスリをはたらき、でてからうろうろしているところをポンピキ（周旋人）が誘うて部屋にうりにきた。その性格は無口で、みちでオヤヂに出遇うてもニコリともせず、トモとも言葉をかわしたことがない。あいは梯子段に腰かけていて遊びにもゆかず、仕事はどこへいっても三日坊主であるという。かつて温かみをしらぬさびしい性格の典型であった。

(五)　立ちあんこうの生活気分

ここまで書いていく日かたった。筆をつごうと思ったが、もうあのときの感興がうすれかけている。これでは立ちあんこうの生活気分が、つい机の上の推論めいてしまうかもしれない。わたくしはなまなましい記録を提供するみずからのつとめを思いおこして、土用五郎の炎天のなかをまた築港へといそいだ。港の海風がおもいなしか潮気をふくんで、ちいさな結晶体が無数に首すじにこおりついたように、ぎしぎしする。

この日、いまは部屋の若い衆としてまじめにはたらいているが、記憶にまだ濃い過去に半年ほど、立ちあんこうの生活をしていたという、年のころは二十六、七、わたくしと同年輩位のある青年に遇うた。

何でも中学校を中途退学したという、教養もまんざらなくもない、顔もきりりということもととのうている。故郷(くに)は大和であったというが、縁あってかMさんの部屋によびこみ(新参)、一週間は不眠不休の労働をつづけた。こうした徹夜の作業をトオシといい、徹夜後翌朝もつづけるのをオヒトオシという。とにかく彼がこの労働で半勘定にとった最初のショウマイ(給金)は七円、同輩のトリマエの最高であった。勘定の夜、あくる日はゆっくり休んで女郎買いにゆこうと、金を夜具の下にしいて寝た夜に、トモの若い衆にそっくりぬかれて(盗難)しまったのである。悄然とあくる日も仕事にでた。ちょうど同じ部屋ものが二人、トンボ(逃亡)するつもりで荷物をまとめてでてきている者といっしょになり、自分は何の用意もしていなかったが、心にさびしいもののあるときとて、つい誘われていっしょにトンボしたのである。最初の三日はこれら悪友が、持ち金で何もせずに食わしてくれる。その持ち金がなくなった日、今度は俺のものをころそう(入質)と、身につけている装束を脱いで入質する。そのあくる日はどうしてもはたらかねばならない。金チャブの腹をかかえて寄場にでたのである。

しかしいままで部屋にいたものが寄場にでたとて、滅多に仕事にありつけるものではない。仕事の需要がないからではなく、こうである。

「立ちあんこうは風来坊だから、とにかくあてもなしにでてゆくのですが、何かよい仕事をと選択しているあいだに時がたってしまい、ボロクチ(楽でぼろい仕事)をと考えていると、ついあぶれてしまうのです。それで今日はまあよい。金もすこしはあるし、また明日にでもボロクチがころがりこめばどうにかなろう。とそのまま帰るわけで、こんなことをしている間にすっかり人間がわやになるのだと、つくづく思います。これが馴れてくるとオヤヂ(仕事の請負人)の顔をみるとその仕事がわかってくるのです。同じ単価で同じ仕事でも、親方によってとてもえらいところがある、こんなときはケツをわるのはおきまりですから、馴れないうちは突差に仕事の選択というものができないので、ついあぶれるわけです。

いまはそんなことはありませんが、二、三年まえまでは夏はよいが冬は困ったものでどうしても露天でねるわけにはゆかないから、ドヤ代だけは稼がねばならない。皆がそんなわけで、五、六人の仕事に百人位がわっしょわっしょとおしかける、ここで親方に顔みしりがあると、おまえ、おまえと名ざししてくれるわけで、立ちあんこうにも得意(パトロン)があるんですよ。

それから悪友はつきもので、一日はたらいてドヤにかえるとかならず三人位は自分の金をあてにして、ねてまっている。はたらくことが馬鹿らしくなります。やはり窮屈でも部屋のほうはこんな心配がなくてよいと感じ、半年目にまたもどってきました。」

これが仕事にあぶれるあんこうの正味の心、そして立ちあんこうの悲しい生活相である。

それなら立ちあんこうはなぜ部屋にはいらないのか。不況のときならば部屋はトビコミを拒否するが、いまは

そういうことはない。しかも部屋もの一千五百人にたいして、立ちあんこうは四千五百人も大阪にいるのである。部屋では「オヤヂさん、たのみます」といえば、職業スリのほかならいっさい何もきかずにはいれるので、げんにMさんなどはことに性格のわるい、放置すればかならず悪事にはしるというものを、よろこんで迎えている。先日わたくしの訪ねた日にも「今日は保護団体の報恩会から不良少年二人をあずかってきました」とわたくしに紹介してくださった。またひところは、公園のベンチにねむるルンペンのなかから、みよりなく唖のために浮浪している少年をみつけてきた、その感化教育により彼等はみな実直な労働者になった。

立ちあんこうはそれをいやがるのである。彼等は「部屋は窮屈だ」という。これももっともな話で、いままではたちの悪い部屋ばかりが多かった。オヤヂが勘定をしない。施主とぐるになって酷使する。公園のベンチでねむるほうがよほど気楽だという印象を、全部の立ちあんこうにしらぬ間に植えつけてしまった。親身にたよる人のないさびしみを、一口に浮浪者的性格の持主として片づけてきたのは、一体いつの世のもの知り人であったろう。わたくしは一日、某組の部屋あんこうから、彼が炭坑生活をした二十歳台の身の毛もよだつような思いで話を物語られた。こうした話は監獄部屋物語りとして、すでに識者の眼にふれていよう。まだ住み心ちよい家というものをもったことのない立ちあんこうには、監獄部屋をのみ想像しているのも無理ない徒輩であった。

(六)　あんこうの教化について

数多くある部屋のうちでも、一番わけのわかったオヤヂのMさん、福利施設もちいさいながら学ぶべき点の多いMさんについてきいてみた。

「あんこうは部屋にいても普通は半年位ででてしまいます。そして転々としてしまいはルンペンになるので

すが、わたしのほうではたいてい二年位はいます。ふしぎなものでいったんトンボしてもたいていは二、三ヵ月目にもどってきます。この仕事はとても気苦労が多くて、わたしも家内（主婦）もろくに休まったときはありません。

この部屋の方針はわるいことがあっても絶対になぐらせないというので、真に親子として兄弟としてあつかっていますから、どんな者でもたいてい心がなおります。なかには心からのドロボーもあり、いまも三人ほどいますが、つかまえるとこれだけは徹底的にわたしがなぐって、あとから家内が心からなぐさめる、ほんとうに手をかえ品をかえてやると、いったん部屋をトンボしても、二、三日目にふいともどってきて、それからは生れかわったように仕事をします。警察からあずかったのがひところ十人ほどいましたが、このときばかりは一週間というもの夜もねむりませんでした。しかし、それらもいまはよい労働者になって、この仕事をやっている趣味もわかり、ひとりでにほほえまれてくるのです。また本人もその後はあまえるようになります、人間て面白いものです。

はじめはマッチ一本から、転々と悪へとたどるので、このきっかけをつくらせないことが大事で、荷物は全部下の押入れへ番頭があずかるようにしましたから、ドロボーもなくなりました。」

この部屋のよいところはもう一つ茶話会[1]である。月一回、たいていは朔日の夜に主人も主婦も、番頭も若い衆も、一同車座になって、安もののせんべいをつまみ茶を飲んで話あう。こうしたあつまりはわれわれにも経験のあるとおり、人の心と交際のうれしさをしるよい所縁（つが）になる。いままでただ多くのむごいオヤヂとアタマという仲間搾取のことだけしか考えなかったなかからは、けっしてよいはたらき党は生れなかった。そして社会のためにもならなかった。わたくしは数多いオヤヂのなかに、黙々と自己の理想を実践しているMさんのような人を、

ただ一人でもみつけえたことを幸いだと思っている。性格のひずんだ人たちの精神をも、窮乏の淵に沈澱する一歩手まえに済度しうるみちのあるという、ある光明をきかされて、社会のために心つよく覚えたことであった。

いたずらに暗い、敗残者的な性格のみをながめ、彼等を卑屈せしめるような同情は、けっして彼等を救うみちではない。労働と切りはなした慈善のなかに、何の光明ものこりはしない。悪はあくまで矯めねばならぬが、のばせばのびる性格をみいだし、もしこれを生産的にも能動しうるものでありうれば、われわれの仕事の領域はもっと大きくひろがり、もっと快い希望がもてるではないか。心をゆるした真実のオヤヂがあれば、翻然と悟って、身も心もまかせかつあまえる。どこかにまだ伝統の民族性は生きているのである。

部屋ものは昔は親分子分の仁義によってつながっていた。いまも土工の仲間、仲仕の仲間という「ナカマ」の制度は、絶対の威力をもつ親分のもとに小頭と平仲間の組織が整然ととのうている。小頭が部屋をもち平仲間がそこに起臥し、毎日ひきつれてきまりの仕事場にでむくという組織である。もっとも悪い連想のある遊び人の仲間でも仁義は常人社会以上のものが多かった。ただ盃をかわしたうえは（昔は血をわかちのみあった）一心同体となり、理非の分別もなく、親分のいいつけならば人をも殺しにゆくという心は、悪用すればいくらでも悪くはなるが、わがことでもないのにすぐ悪をみて腹を立てるいわば公腹（おおやけばら）という生活気分は、結局倫理的道徳以前の感情的な律であった。部屋あんこうにもこの気分は多分に生きている。朝の番頭の起し方がわるかったのでその日は仕事を休んだとか、仕事の途中何か気にいらぬことがおこると勘定もとらずにさっさともどってくるという気分、これを善用すればぞっこん心服したオヤヂのためなら労苦も忘れてつくすというようになる。この感情本位の道義と律とは、論者あるいは封建の遺風というかもしれぬ。しかもまだ彼等のおどる血しおのなかに、かすかに、波うつこの気分を、無惨にうちこわそうとしているのは現代の社会ではないか。古い道

義にかわるべき新らしい律の発見せられぬうちに、遠慮もなく環境は一変した。かつて尊ばれた社会の仁義も、この嵐のまえにははかなくも虐げられ、あるいは変りものとしてあるいは犯罪者として、みじめな一生をえた人がいく人あるだろう。その人たちの冥福をいのるためにも、よるべなき浮浪者の心をみちびく大役を、甘んじてわれわれは引きうけねばならない。

退屈な散文になった。書きたいことがいくらでもでてくるのをじっとおさえて、これが社会事業とどんな関係にあるかの結論は他人にまかせておきたい。ただ社会事業対象の一歩手まえという心を、ここに一端だけのべてみたものであり、かつて書いた「ごろつきの道徳」[2]やいま連載しつつある「日傭労働者調査手記」（本論集Ⅱ　十一　附録（三）、（四））とも相互に関連するものである。わたくしはいまこの調査を八月いっぱいに片づけようと全力を傾けているので、編輯者からもとめられたが他のことはどうも書けそうにない、思いつきのような散文を送ったことを気がねしているのである。

（七月二十九日）

（1）　この茶話会の一例については、附録「（三）日傭労働者調査手記」の「㈡あんこう部屋の茶話会」を参照されたい（松野）。

（2）　文芸部報7（日本大学専門学校文芸部発行　昭和十三年六月・松野）

本稿　朝鮮社会事業（昭和十五年九月）掲載。